

越中の美しい風景を歌に 大伴家持

奈良時代の越中国守

万葉集の編者・歌人

三十六歌仙の一人

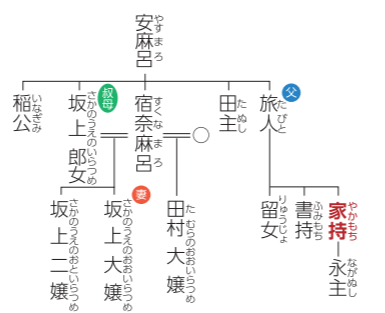


718 (養老2) 年ごろ—785 (延暦4) 年8月28日

若くして大伴氏の当主となる

大伴家持は奈良時代の初めごろ、政治家で歌人の大伴旅人の長男として生まれました。幼くして父を亡くしましたが、歌人として有名な叔母（坂上郎女）に歌の手

ほどきを受けたり、聖武天皇のお側に仕えたりしながら、名門貴族大伴氏の若き当主となりました。



越中の自然や人々の生活に感動

父の跡を継いだ家持が地方を治める長官「国守」として越中国



勝興寺境内にある「越中国守庁址」碑（高岡市万葉歴史館提供）

（現在の富山県に石川県の能登半島を加えた範囲）に赴任したのは、746 (天平18) 年でした。越中国は都から馬に乗っても10日ほどかかる遠い所でした。越中国の国府（政治を行う施設）は現在の勝興寺（高岡市伏木古国府）の辺りにあったと考えられています。

家持には、国守として開墾された土地を見て回り、収穫の様子を視察したり、税を集めたりするなどの大切な仕事がありました。家

持は初めて地方で長官として勤務することを誇りに思い、家族や親しい友人と離れる寂しさはありましたが、意欲をもって仕事に取り組みました。また、雄大な立山や風雅な二上山、氷見や奈呉（現新湊）の美しい海など都とは違う越中の豊かな自然に心から感動し、多くの歌を詠みました。



川の渡し瀬 雪し消らしも 延槻の

越中の山野を巡って

国守は、天皇の命を受けて地方に赴任し、その国の支配の実務を行う上級の役人で、財政・裁判・軍事の強い権限をもっていました。

743 (天平15) 年の墾田永年私財法*によって、農地の開発が盛んになりました。家持はこうした開墾地や人々の生活の様子を観察するため、射水郡にあった越中国府から砺波郡・婦負郡・新川

郡・羽咋郡・珠洲郡などを巡りました。新川郡には748 (天平20) 年春に訪れた際、延槻川（現早月川）を詠んだ歌が残っています。

家持が越中国守だったころ、米がたくさんとれる砺波地方で広い農地をもっていた豪族に利波志留志がいます。東大寺に農地や米を寄付して官位を授けられています。

* 墾田永年私財法【こんでんえいねんしざいのほう】 奈良時代中期の聖武天皇の時代の743 (天平15) 年に発布された天皇の命令です。自分で新しく開墾した耕地（墾田）をずっと個人のものとしてよいとされました。



5年間に約220首を詠む

家持が最も気に入っていた場所の一つは、現在の十二町瀧（氷見市）から広がる「布勢の水海」です。たびたび舟遊びに訪れました。当時は海に近く、変化に富んだ湖の美しいこの場所に、都からのお客さんを招いてもてなしをしています。都に戻った後に家持が編集したとされる現存する日本最古の和歌集『万葉集』4516首中、家持の歌が473首含まれ、越中に住んだ5年間に詠んだ歌はおよそ220首に上ります。

このうち、有名な歌に「立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし」（巻17）

という歌があります。「立山に降り置いている雪は、夏の今見ても見あきることがない。神の山だからに違いない」といった意味が込

められています。「万葉のふるさと」といわれる高岡市では、毎年10月初めに「万葉まつり」が開催され、家持の住まいがあったといわれる風雅な二上山のふもとには高岡市万葉歴史館があります。市内を走る路面電車の愛称「万葉線」にも「万葉」の名が残ります。また、高岡市内の小・中学校生が集まって、「越中万葉かるた大会」が開催されています。



高岡市万葉歴史館（高岡市万葉歴史館提供）



雨晴から見た立山連峰（高岡市万葉歴史館提供）

夢や志をかなえたポイント

- ・ 家族からいろいろなことを学ぶ
- ・ 自分の住んでいるところを愛する
- ・ 美しい風景への思いを素直に表現する

豆知識 家持は立山や二上山など越中を代表する風景を和歌にしています。

718ごろ (養老2ごろ).....0歳
大伴 旅人の子として生まれる

745 (天平17).....27歳
従五位下の位を授かり貴族の仲間入りをする

746 (天平18).....28歳
越中国守に任命される

751 (天平勝宝3).....33歳
少納言となって都へ帰る

781 (天応元).....63歳
従三位の位を授かる

783 (延暦2).....65歳
中納言に任命される

785 (延暦4).....67歳
中納言従三位として亡くなる

コラム 越中の豊かな自然と そこに生きる人を歌う

家持は、越中の豊かな自然に加えて、そこに住む人々の生活も題材とし、生き生きとした姿を歌に詠んでいます。

もののふの 八十娘子らが 汲まがふ 寺井の上の 堅香子の花 (たくさんの少女たちが、入り乱れて水を汲んでいる、寺の境内の清水のほとりに咲いたかたかごの花よ)

待ちかねた春を喜ぶ大勢の少女たちと、群がり咲いているかたかごの花が調和し、生き生きとした感じが伝わってきます。



かたかご（かたくり）（高岡市万葉歴史館提供）

民を守り、産業の発展を目指す 前田利長

高岡の町を開いた大名

富山・金沢城主

120万石の大名

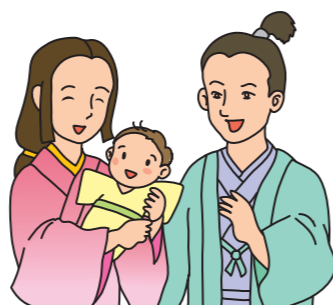


1562(永禄5)年1月12日—1614(慶長19)年5月20日

武術が得意な子ども

織田信長の有力な家臣であった前田利家と高田直吉の娘、まつとの長男として尾張国愛知郡荒子(現愛知県名古屋)で生まれました。幼名を犬千代といい、武

術に優れ、勇気のある子どもでした。この時代は戦国時代の終わりで、信長が天下統一を目指していました。



人々の心をとらえる政治を

安土城で信長に仕えていた利長は信長に見込まれて1581(天正9)年8月、19歳のときに越前府中城(福井県越前市)の城主となり、12月に信長の娘の永姫と結婚しました。しかし、翌1582年、信長が明智光秀に討たれる「本能寺の変」が起きました。

利長は信長の命により父利家とともに各地で戦っていました。信長が亡くなった後は、豊臣秀吉に

仕え、1583(天正11)年松任で4万石を与えられました。その後、1585(天正13)年に佐々成政(→76ページ)が豊臣秀吉に降伏したことから砺波・射水・婦負の三郡の支配を任せられ、守山城(現高岡市)に住みました。1598(慶長3)年、利長36歳のとき、父利家の跡を継ぎ、金沢城主となりました。利長は領主として人々の心をとらえることを大切にしました。

自らの国と家を守る決断

利長は父の跡を継ぎ豊臣政権の五大老として、天下取りをねらう徳川家康に対抗する位置にありました。

しかし、1600(慶長5)年、天下分け目の関ヶ原の戦いの前には、越中や加賀国が戦場になって人々が苦しむことを避け、前田家が今後も栄えていくにはどうしたらよいかを考えた利長は、豊臣方の西軍についた北陸の城を攻め落とし、家康の東軍が有利になる

ように動いたのです。

戦いは家康が勝利したため、利長には領地が加えられ、加賀・越中・能登の120万石を支配する大名になりました。

1605(慶長10)年、家康が將軍の位を息子の秀忠に譲ったのを機に利長は、弟の利常に前田家を継がせました。利長自身は隠居し、越中新川郡の富山城で暮らすことにしました。



利長愛用の「銀鯉尾形兜」(富山市郷土博物館蔵)

*郷土【ごうじ】 農村に住んだ武士や、武士の待遇を受けていた農民のことです。

高岡の町の基礎を築く

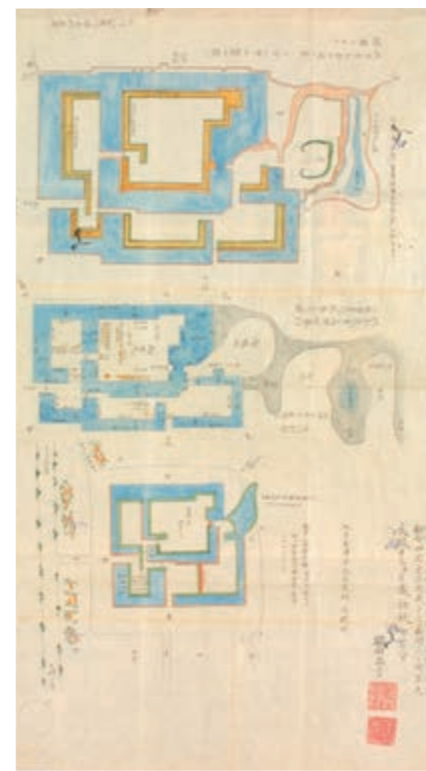
富山城に移って4年後、富山大火が起き、お城も焼けたので魚津城へ移って新しい城の建設を計画します。建設場所に決めた射水郡関野(現高岡市)の地名を「高岡」に改め、新しい城と城下町の建設を始めました。

利長によって高岡の町が開かれた江戸時代の初めごろの砺波郡は、交通の便が悪い場所でしたが、17世紀半ばごろには、城下町や門前町であった石動・城端・井波の町の中間に町が必要だと考えた砺波郡の郷土*の阿曾三右衛門によって福野・福光・津沢の町が新しく誕生しました。

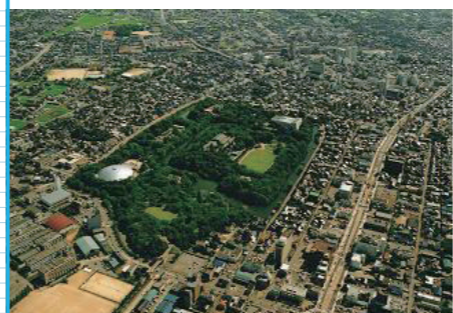
利長はまた、領内の産業を興すことにも努めました。各地で新しい田を開き、亀谷銀山(富山市)を掘らせて「花降銀」という貨幣を造ったほか、瀬戸村(立山町)で陶器の製造を始め、高岡や井波の松物師(薄い板を曲げ食器や日用品を作る職人)などを保護してその産業を奨励しました。

利長は、小矢部川の水運を大切に考えて、城や城下町に必要な大

量の材木が運ばれる木町の位置を決めました。また、北陸街道の両側に商業地区を配置し、商人や職人を指定の場所に住ませて、税金を免除するなど、町の発展に力を尽くしました。特に砺波郡西部金屋(現高岡市)より鋳物師(金属を铸造する技術をもつ職人)を呼び寄せ、現在の高岡銅器の基礎を築きました。高岡の発展に尽くした利長は高岡城において、52歳で亡くなりました。



「高岡城之図」(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵、高岡市立博物館提供)



高岡古城公園全景 (高岡市立博物館提供)

夢や志をかなえたポイント

- ・ 広い視野で状況を判断して行動する
- ・ 何もないとこから新しいものを生み出す
- ・ もともとあるものを上手に生かす

豆知識 利長の死後、「一國一城令」によって高岡城は取り壊されてしまいますが、堀などは完全に残されています。その跡地が高岡古城公園です。

- 1562(永禄5) 0歳 前田利家の長男として生まれる
- 1581(天正9) 19歳 越前府中城の城主となる
- 1587(天正15) 25歳 豊臣秀吉に従い九州征伐に出陣し名をはせる
- 1597(慶長2) 35歳 富山城主となり修築する
- 1598(慶長3) 36歳 金沢城主となる
- 1600(慶長5) 38歳 関ヶ原の戦いの前に北陸で手柄をたて120万石の大名になる
- 1605(慶長10) 43歳 富山城に隠居する
- 1609(慶長14) 47歳 富山城が火災にあい高岡城を築く
- 1610(慶長15) 48歳 はれ物の病気になる
- 1614(慶長19) 52歳 高岡城で亡くなる

コラム 高岡御車山祭のルーツ

高岡御車山は、前田利長が高岡城を築くにあたり、父の利家が豊臣秀吉から贈られた御所車を町民に与えたのが始まりと伝えられています。この御所車に鉾を立てたものが御車山といわれています。高岡の金工・漆工などの優れた工芸技術を装飾に見ることができます。御車山と祭礼行事は国の重要有形・無形民俗文化財の両方に指定されています。

重要無形民俗文化財：人々が日常生活の中で生み出し、長い間引き継がれてきた形のない文化財。衣・食・住・信仰、年中行事などに関する人々の慣習、芸能、技術などのうち、特に重要なものとして国が指定したもの。

重要有形民俗文化財：無形の民俗文化財に用いられる衣服、器具、家屋など、形のある民俗文化財のうち、特に重要なものとして国が指定したもの。



高岡御車山祭 (高岡市提供)

富山藩に新しい産業を 前田 正甫

第2代富山藩藩主

富山売薬の基礎を築く

領内の産業を奨励

1649 (慶安2) 年8月2日—1706 (宝永3) 年4月19日



初代藩主の孝行息子

富山藩初代藩主・前田利次の第2子として生まれました。1674 (延宝2) 年、正甫が25歳のとき、江戸城にいた父が急死したため、跡を継いで2代目の藩主になりま

した。母親孝行で知られ、江戸から富山へ帰ると、旅姿のまま母の住まいを訪れ、安否を気遣う姿が見られたといひます。



正甫は富山市内の鹿嶋神社境内の一部にあった家老の下屋敷で誕生したと伝えられています。



現在の富山城 (富山市郷土博物館提供)

新しい産業を興す

正甫が藩主になったころ、水害や日照りが続き、米があまりとれない年が続いていました。それだけでなく、1675 (延宝3) 年には3月と4月に大火があり、城の一部や富山の町の千数百戸が焼けてしまいました。

1681 (延宝9) 年、越後の高田藩 (新潟県上越市) の殿様が罪を犯して伊予国 (愛媛県) に流されたため、幕府から高田城の明け

渡しを命じられました。殿様が流されたことに不満をもつ家来もいて、混乱なく城を取り上げることは簡単ではありません。正甫は大勢の武士や馬を集めて出陣し、無事に任務を果たしたものの、予定外の費用がかかりました。

正甫は、藩の出費を切り詰めるとともに、新しい産業で藩の収入を増やす政策に取り組みました。

製鉄・工芸・売薬を勧める

正甫はまず、家臣たちに休暇を与え、その分の給料を払わずに出費を抑えました。また、藩札* (銀札) も発行しました。さらに、産業を盛んにしようと、但馬地方 (兵庫県北部) からは砂鉄を利用して鉄を作るタタラ製鉄の技術者を呼びました。ほかに、漆器 (うるしを塗った器物) に金や銀で模様を描く「蒔絵」や貝殻で飾り付ける「青貝細工」など、美術工芸

の名工らも招いています。また、正甫が製薬店や薬種商の商売を奨励したことが、富山売薬の起源とされています。1683 (天和3) 年、正甫は薬種商の松井屋源右衛門が連れてきた岡山藩の医師に「反魂丹」という漢方薬を贈られました。この薬に正甫は興味をもち、松井屋に作らせたことが1887 (明治20) 年ごろの『富山反魂丹旧記』に書かれています。



富山の薬売りが客への土産とした売薬版画 (富山市郷土博物館蔵)

* 藩札【はんさつ】 藩が私的に発行する紙幣のことです。

富山売薬の基礎をつくる

越中に薬種商があったことは戦国時代の記録にあります。また、立山で薬草が採れることから、立山信仰が売薬の起源にかかわりがあるともいわれています。江戸時代の中ごろにはこうした伝統を生かして「反魂丹」の製薬と販売が盛んになりました。

富山藩では、江戸時代中ごろから財政難を解消するために産業を奨励しました。藩は特別に売薬業だけの役所を置き、売薬を奨励するとともに、売薬人に税金をかけ藩の財政に役立てました。売薬の「先用後利」という商売のやり方は現在に受け継がれています。

反魂丹については、次のようなエピソードが伝わっています。

1690 (元禄3) 年のある日、江戸城で三春藩 (福島県三春町) の藩主である秋田輝季が腹の痛みに襲われました。そこに居合わせた正甫が反魂丹を飲ませたところ、たちまち回復しま

した。諸国の大名たちは感心し、正甫に「この薬を全国で販売してほしい」と頼んだと伝えられています。

正甫は、領地から出て全国どこでも商売ができるように「他領商売勝手」というお触れを出し、反魂丹を行商させました。



江戸時代、中包に包んだ薬を入れた袋 (富山市売薬資料館蔵)



江戸時代に出版された『二十四輩順拜図会』に「はんこん丹」のふるしきを背負い諸国を旅する売薬商人の姿が描かれています。(富山市郷土博物館蔵)

夢や志をかなえたポイント

- 親を大切に
- 無駄を切り詰める
- 目先の利益よりも、信用を大切に

豆知識 正甫は若いころから健康に気を使い、毎朝午前6時に起き、午後10時には寝るという規則正しい生活を続け、また水泳、相撲、武術を奨励して自らも先頭に立って、体力や精神力を鍛えることに励みました。

- 1649 (慶安2) 0歳
富山藩主前田利次の子として生まれる
- 1664 (寛文4) 15歳
元服する
- 1674 (延宝2) 25歳
富山藩2代藩主となる
- 1681 (延宝9) 32歳
越後高田城へ出陣する
- 1683 (天和3) 34歳
反魂丹に興味をもち松井屋に作らせる
- 1691 (元禄4) 42歳
日蓮宗に改宗する
- 1706 (宝永3) 56歳
病気で亡くなる

コラム 忠義者の家臣をほめた正甫

1702 (元禄15) 年、赤穂浪士が殿様のかたき討ちを果たすという事件が起きました。このとき、正甫は藩の重役に「もし富山藩でこのような事件があったら、赤穂のような義士がでるだろうか」と聞きました。

重役は「殿が平素から家臣を大事にしなれば、一人の義士でもないでしょう」と答えたので、正甫は機嫌を悪くしました。しかし、その後、怒った自分が悪いと気づき、重役をほめ、禄 (給料) を上げたそうです。



富山城址公園にある「前田正甫公像」 (富山市郷土博物館提供)

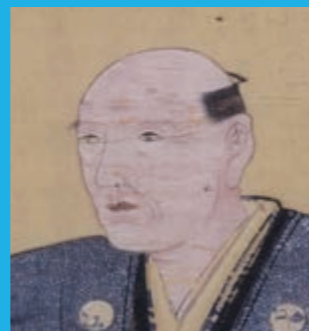
加越能の正確な地図を作りたい 石黒 信由

和算家・測量家・天文家

加越能の美測地図を作成

測量の道具を考案

1760(宝暦10)年11月18日—1836(天保7)年12月3日



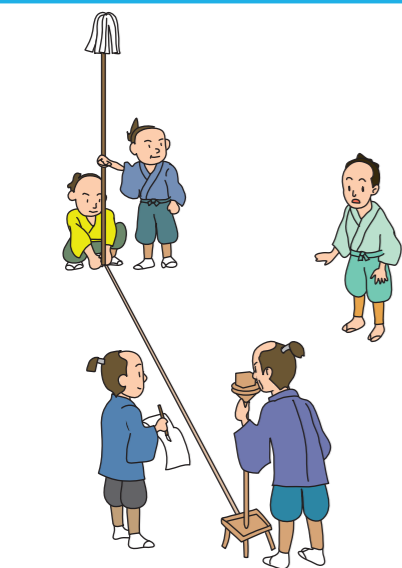
算学者を夢見る少年

射水郡高木村(現射水市)で裕福な農家の長男に生まれました。1歳半のときに父が亡くなり、祖父母に育てられました。幼いころから算学が好きだった信由は平安

時代に射水郡出身の三善為康(→74ページ)が日本一の算学者になった話を祖父から聞き、自分も算学を研究する学者になりたいと夢見ていました。



信由が愛用したそろばん「唐算盤」。上の珠が2つ、下が5つの古い中国様式です。



学んだことを活かす

富山城下の桃井町(現富山市)には中田高寛という優秀な学者がいました。高寛は、江戸で本格的に算学を学んで富山に戻り、塾を開きました。信由は22歳のときから13年もの間、富山城下にある中田先生の塾まで歩いて通い、勉強しました。

算学を十分に理解した信由は、先生から免状を授かりました。さらに、「学問のための学問ではだ

めだ」と西洋数学や天文暦学も学びました。

1803(享和3)年の8月3日、全国を測量していた伊能忠敬*の一行が越中の放生津(現射水市)に来ました。信由は宿泊先を訪ね、面会を求めました。翌日、信由は忠敬と同行し、測量方法などについて忠敬の話に耳を傾けました。その際には、忠敬が使っていた最新の磁石を見せてもらいました。

7年かけて正確な地図が完成

1819(文政2)年、59歳になった信由は、加賀藩から越中(富山県)・加賀(石川県南部)・能登(石川県北部)の地図を作るよう命じられました。

信由は忠敬の磁石をヒントにして考案した器具を持ち、三つの国をすみずみまで歩き回り、測量を行いました。危険をかえりみず高い山や深い谷に足を踏み入れ、朝も夜も関係なく危険な作業を続け

ました。顔や手足が血だらけになったり、虫に食われたりしながら、信由は難しい作業を進めました。そして、7年もの月日をかけて三つの国の地図を一枚ずつ仕上げたのです。

完成した「加越能三州部分略絵図」は、現代の技術と測量機器を使って作った地図と比べても見劣りしないほど正確で細かな地図でした。信由は65歳になっていました。



信由の「加越能三州部分略絵図」。現在の地図とほとんど変わらない正確さです。

*伊能忠敬(いのう ただたか) 上総国(千葉県)で生まれ、50歳で江戸に出て暦学(天体の運行の観測や暦を作ることに関する学問)や天文学を学びました。56歳になってから全国の測量を開始し、日本初の正確な日本地図を作りました。



実用のための学問を後世に残す

信由は、学問や技術を実際の生活だけでなく、国や社会に役立たせたいと考えました。算学のほかにも、ヨーロッパの数学などの知識も吸収し、新田開発、河川改修などの測量に生かしたのです。実際、富山県東部の多くの開墾に信由が携わっています。

自ら熱心に研究を重ね、生涯に著した書物は和算書、測量術書など250冊以上になります。信由は測量技術を広め、発展させようとしてきました。また、多くの弟子を育てたほか、その学問は信由の子や孫へと引き継がれ、後の時代の地方の開墾に役立てられました。

さらに信由は、測量器具を改良するなど、さまざまな工夫を凝らしました。方位を正確に測るため磁石を二つ使ったことや、伊能忠敬の道具を改良して強盗式磁石台を考え出したことなどです。これらの器具を活用することによ

て、ほぼ正確な地図を作ることが可能になりました。

現在、射水市新湊博物館には、信由が著した本や絵地図など約1万2000点が高樹文庫と名づけられ、収蔵されています。そのうち3765点が国の重要文化財に指定されています。



信由が考えた強盗式磁石台と軸心磁石盤。でこぼこ道や坂道でも、磁石盤がすぐに水平になる工夫がしてあります。



信由の孫、信之の家限儀。道の傾きを測るために使いました。

信由の「越中四郡村々組分絵図」。当時のすべての町や村が記されています。

夢や志をかなえたポイント

- ・目標にする人物に近づく努力をする
- ・学問は何歳からでも始められる
- ・自分の学んだことを周りの人のために生かす

豆知識 信由は高木村に生まれたことから別名を「高樹」と名乗りました。

- 1760年(宝暦10).....0歳
射水郡高木村に生まれる
- 1782年(天明2).....22歳
中田高寛の門人となり、関流の算学を学ぶ
- 1796年(寛政8).....36歳
中田高寛から関流算法の免許を受ける
- 1799年(寛政11).....39歳
西村太冲に入門し、天文暦学や西洋数学を学ぶ
- 1801年(寛政13).....41歳
宮井安泰から山崎流測量術免許を受ける
- 1803年(享和3).....42歳
伊能忠敬と出会い、最新の測量器具を見せてもらう
- 1819年(文政2).....59歳
加賀藩から加賀、越中、能登の地図を作るよう命じられる
代表的な算術書『算学鉤致』を出版する
- 1825年(文政8).....65歳
「加越能三州部分略絵図」を完成させる
- 1836年(天保7).....76歳
「算法渡海標的」を出版の後、亡くなる

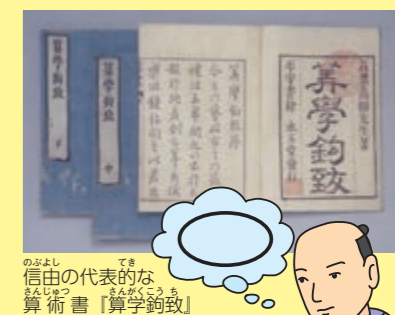
コラム

和算の風習

日本独特の数学・和算には、本の巻末に問題だけを載せ、解答は付けないという風習がありました。

信由のころには100年以上もの間、だれも解けなかった問題が数多く残されていました。信由は著書『算学鉤致』の出版でこれらをすべて解き、自らは新たな問題を残しませんでした。

『算学鉤致』の出版は、和算独特の風習を断つことになったのです。



信由の代表的な算術書『算学鉤致』



用水や新しい水田を開発 椎名 道三

多くの新田を開発

室山野用水を完成させる

十二貫野用水をつくる

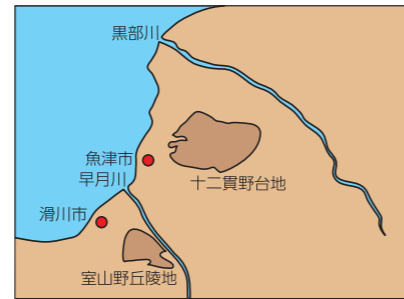


1790 (寛政2) 年3月—1858 (安政5) 年6月15日

貧しい山村で育つ

道三は江戸時代に、新川郡小林村(現滑川市)の村役人の二男として生まれました。その後、間もなく、大熊村(現魚津市)の椎名家の養子になりました。当時は田

が少ないうえに天候の影響を受けることが多く、毎年たくさんの年貢米*を納めなければならぬため、農民の多くは食べる米にも困るほど貧しい生活をしていました。



大仕事に挑戦

当時、林や荒れた土地を切り開いて用水を造って水を引く、米作りができるようにすれば、農民が安心して生活できるようになるとだれもが思っていました。でも、今のように機械はなく、とても難しい仕事なので実行する人はいませんでした。

道三は土木・測量の技術を習得し、14歳のときには、わずかな面積ながら、村の谷川の水を集めて水田を作り、周囲の評判を呼びました。16歳のときには、大熊村の押場



道三が手掛けた宮野用水と十二貫野用水が描かれた「新川郡十二貫野并宮野御仕立開用水筋略図」(富山県立図書館蔵)

峠の斜面を田にしようと計画し、養父に協力してもらって雑木林を切り開き、近くを流れる川の水を引き込み3年がかりで4.5haも

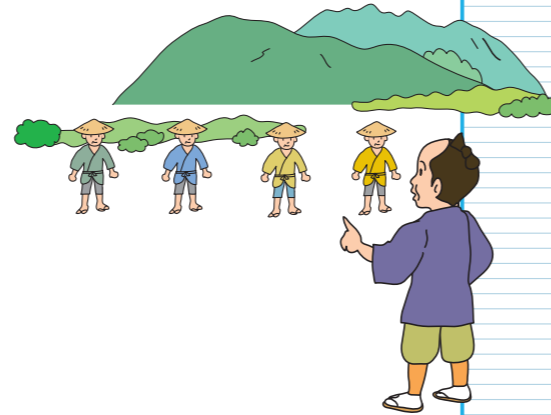
の田を完成させました。田の調査に来た加賀藩の役人は16歳の少年が中心に行った仕事だと聞いて、大変驚きました。

傾きを測る方法を考え出す

山あいに水を引くには、土地の広さや傾きの程度などを調べる技術が必要です。道三は自分でやり方を工夫しました。

道三は作業をしている農民たちに菅笠をかぶらせて並ばせ、離れた場所から半分に割った竹を菅笠の列の傾きに合わせ、竹に水を入れて傾きを測ったと伝えられています。

そのころ、富山の農民らが室山野丘陵地で掘った用水路が崩れ、水が引けなくて困っていました。そこで道三は用水路の掘り直しを藩に願い出て、別の場所から水を引くことにしました。土砂崩れの激しい場所では土砂が崩れ落ちるのを防ぐため2000本のクイを打ったり、多数のトンネルを掘ったりして、見事に水を通しました。



*年貢米【ねんぐまい】 田や畑を耕して作物を作る人が、その土地を治める殿様に毎年納めなければならない税。江戸時代は米で納めるのが普通で、年貢米といいました。

十二貫野台地を水田に

1836 (天保7) 年ごろ、日本は大飢きんに見舞われていました。加賀藩の新川郡では、食べ物に困った人々が草の根や木の皮を求めて黒部川左岸の十二貫野台地に集まりました。そのうち奪い合いとなり、死者が出るほどの大騒ぎとなりました。このため藩は道三に命じ、十二貫野台地を切り開いて田を作ることにしました。

十二貫野台地は周囲の山々から孤立しており、水を引くには、かなり高い技術とたくさんのお金が必要です。工事は1839 (天保10) 年5月に始まり、宇奈月の谷の奥から水を引く、いくつもの山を巡り、16か所にトンネルを掘る難工事となりました。

完成したのは1841 (天保12) 年9月のことでした。わずか2年4か月で成し遂げたのです。この工事では、谷の向かい側の山に通す用水路に高低差を利用したサイホンの原理*が使われています。当

時、人々は「神業だ」と驚きました。道三は、生涯に越中や加賀、能登で合わせて1200haの田を開発しました。これにより米の収穫量は1500t 増え、1400人あまりの農民が恩恵を受けたのです。



十二貫野湖 (水土里ネット富山提供)



道三が開いた十二貫野用水の支流である電ノ口用水のサイホン用の石管 (水土里ネット富山提供)



道三が開いた十二貫野用水 (水土里ネット富山提供)

夢や志をかなえたポイント

- 人々が豊かになるために工夫する
- 自分でやりかたを考える
- 難しくそうなことにも挑戦する

*サイホンの原理【さいほんのげんり】 水が詰まった管を使って、水を圧力の差によって途中の高い所を越えて低い所へ移す仕組みです。この原理は灯油のポンプなどの道具に利用されています。

1790 (寛政2)	0歳
新川郡小林村に生まれる おおくまむらの椎名家の養子になる	
1804 (文化元)	14歳
大熊村で開墾に着手し0.2haの水田を完成させる	
1806 (文化3)	16歳
大熊村押場 峠の開墾を行う	
1825 (文政8)	35歳
室山野用水づくりを再開する	
1832 (天保3)	42歳
大永田山に移り住む	
1837 (天保8)	47歳
宮野の開発に着手する	
1838 (天保9)	48歳
十二貫野の開墾を命じられる	
1841 (天保12)	51歳
十二貫野用水を完成させる	
1858 (安政5)	68歳
中風になり亡くなる	

コラム ほうびや年貢も農民のために

道三は新しい田を開いたほうびに藩から土地などをもらいました。しかし、自分のものにするのではなく、貧しい農民に与えて米を作らせたり、もらったほうびを農民の肥料代に回したりしています。それでも食べていけない農民の生活の面倒も見たため、藩から借金までしてしまいました。



椎名道三顕彰碑と銅像 (滑川市田林)

北陸に西洋医学を広めたい 黒川 良安

シーボルトに学ぶ

江戸一番の蘭学者

金沢大学医学部の基礎を築く



1817 (文化14) 年2月6日—1890 (明治23) 年9月28日

父に従い長崎で蘭学を学ぶ

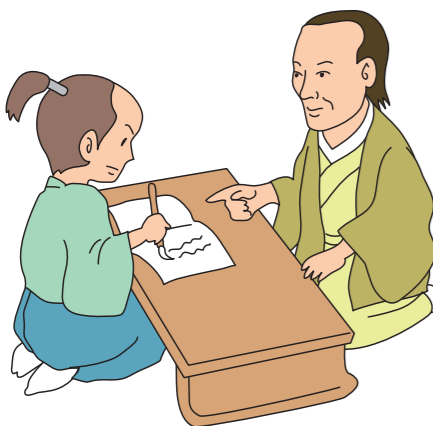
良安は新川郡黒川村（現上市町）で、漢方医の長男に生まれました。父は、良安が医者になりたいと考えていることを知り、良安と一緒に長崎で、西洋医学を学ぶ

ことにしました。長崎ではまずオランダ語を勉強し、次に、オランダ商館で医師をしていたドイツ人のシーボルトの塾に入り、親子で医学を学びました。

良安の顕彰碑（上市町黒川）



幅広い知識を身に付けたい



7年後、父は故郷へ帰りましたが、良安はまだ勉強が足りないと考え、長崎にとどまります。医学だけでなく、天文学・数学・兵学など幅広い知識を身に付けようと思いました。中でも、日本で一流の蘭学者として知られた緒方洪庵*の教えを受ける機会を得たことは、良安の大きな財産となりました。1836 (天保7) 年に起きた全国的な大飢饉のとき、長崎奉行は食

料不足を防ぐため、他国から来ている者に国へ帰るよう命じました。しかし、良安は「米さえ食べなければ迷惑をかけないだろう」と、砂糖を毎日なめてがんばりました。

良安は1840 (天保11) 年、12年間の長崎留学に区切りをつけて故郷に帰りました。翌年には洪庵らの勧めで江戸（現東京都）へ行き、洪庵の師である蘭学者、坪井信道の塾の塾頭を務めました。

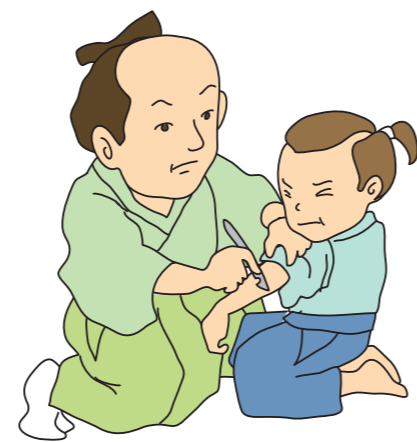
息子に天然痘の予防注射

良安は江戸で松代藩（長野県長野市）士の佐久間象山**と出会い、オランダ語を教えました。一方、良安は佐久間から漢学（中国の学問）を学んでいます。

佐久間は良安を「江戸で一番の蘭学者」と尊敬し、良安を松代藩へ迎える運動を進めました。同じころに良安は、故郷に近い加賀藩（富山県・石川県）から藩医として招かれていたので、1846 (弘

化3) 年、佐久間の誘いを断り金沢へ行きました。

良安は藩医として西洋医学を広めることに力を尽くしました。長崎で日本初の種痘（天然痘の予防接種）が行われた翌年には、長崎から痘苗（種痘に用いるワクチン）を取り寄せて長男に接種しました。それを知った民衆は痘苗の効果を信用し、何百人もの人が種痘を受けました。



* 緒方洪庵【おがた こうあん】江戸時代末期の蘭学者、医学者、教育者。大坂で開いた蘭学の私塾「適塾」からは大村益次郎、福沢諭吉ら明治時代に活躍した多くの人材を出しました。



金沢大学医学部の前身を創設

良安が種痘を行ったことがきっかけとなって1862 (文久2) 年、加賀藩の援助により「彦三町種痘所」が開設され、その5年後には「養生所」が建設されました。養生所は西洋式の病院に医者の養成所を合わせたような施設でした。さらに加賀藩は1870 (明治3) 年、「医学館」を建設して養生所の医学生をそこへ移して教育を行い、付属病院を建てて一般の患者を治療しました。旧の養生所は、貧しい人や囚人を治療する「貧病院」に改めました。こうした改革は、1868 (明治元) 年から良安が長崎へ視察に出かけ、医学教育や医療機関の在り方について研究してきた成果が生かされたものでした。

「医学館」は後の金沢大学医学部（現医薬保健学域医学類）となり、良安は医学部の「学祖（基礎を築いた人）」として学生らから尊敬されています。



良安が長崎から持ち帰った人体模型（金沢大学医学部記念館資料室蔵）



良安のレリーフ銅像（金沢大学医学類蔵）



明治時代後期の金沢医学館（金沢大学医学部記念館資料室蔵）

夢や志をかなえたポイント

- 幅広い知識を身に付ける
- 自分が実践して手本を示す
- 勉強の成果を多くの人のために役立てる

** 佐久間象山【さくま しょうざん】幕末の兵学者、思想家。信州松代藩士で、西洋の学問や歴史を学び、開国論を説きました。門弟に吉田松陰、勝海舟、坂本龍馬らがいます。

- 1817 (文化14) 0歳
新川郡黒川村に生まれる
- 1828 (文政11) 11歳
医学を学ぶため長崎へ行く
- 1840 (天保11) 23歳
帰郷する
- 1841 (天保12) 24歳
江戸で蘭学者坪井信道の塾の塾頭になる
- 1846 (弘化3) 29歳
加賀藩の藩医になる
- 1862 (文久2) 45歳
藩の援助により彦三町種痘所が開設される
- 1864 (元治元) 47歳
加賀藩種痘所の頭取になる
- 1867 (慶応3) 50歳
養生所の頭取になる
- 1870 (明治3) 53歳
医学館の創設に参画し医学館総督医になる
- 1885 (明治18) 68歳
東京へ移り住む
- 1890 (明治23) 73歳
亡くなる

コラム 幕末の剣術家 斎藤弥九郎

幕末から明治時代初期にかけて、射水郡仏生寺村（現氷見市仏生寺）出身の斎藤弥九郎（1798-1871年）は、剣の達人として名をとどろかせました。弥九郎（神道無念流）の練兵館は、千葉周作（北辰一刀流）の玄武館などと並んで「幕末の江戸の三大道場」と呼ばれました。桂小五郎や高杉晋作、伊藤博文など、明治維新で活躍する多くの志士が、この道場から出ました。



斎藤弥九郎（氷見市教育委員会提供）

新しい時代を担う人材を育てよう

岡田 呉陽

藩校広徳館の先生

藩主に学問を教えた

私塾で優秀な人材を育成



1825 (文政8) 年7月18日—1885 (明治18) 年6月29日

有名な寺子屋の二男

「小西屋臨池居」という寺子屋を開いた小西有斐の二男です。本名は信之といひます。この寺子屋は呉陽の祖父が始めたもので、北陸でも最大の寺子屋でした。19歳

のときから、幕府が江戸に開設した昌平坂学問所(昌平校)で3年間学びました。優秀な仲間たちの中で呉陽は勉強に意欲を燃やし、特に漢詩文が得意でした。



江戸時代の昌平坂学問所の絵図(部分)(斯文会提供)

有能な人材を育てたい

富山に戻った呉陽は、富山藩の藩校「広徳館」の学頭(校長)をしていた岡田栗園の養子に迎えられ、「岡田呉陽」と名乗ります。

栗園は富山藩10代藩主の前田利保に協力して本草学(薬草など薬になる天然の産物を研究する学問)の本を著した学者です。

栗園の引退後、岡田家を継いだ呉陽は藩の馬廻役(藩主に付き添い、事務の取り次ぎなどを行う役)

と広徳館の学正(先生の階級の一つ)に任命されました。その後、藩の横目職(藩士の行動の監察や論功行賞を行う役)を経て、藩では近習頭(藩主の秘書役)に、藩校では藩主に学問を教える文学(先生の階級の一つ)になりました。



広徳館孔子像(富山県立図書館蔵)

新しい時代の学校を設立

呉陽が藩校に勤めた幕末は、開国をめぐって日本の政治が激動していました。

呉陽は藩校で藩士の動揺を抑えるのに努力しました。また、新しい時代に活躍できる人材育成に向けて、藩校の先生たちが家で塾や道場を開くことができるよう制度を改め、庶民の子どもにも教育を受ける機会をつくりました。

1871 (明治4) 年、明治政府

は藩を廃止し、府と県を置く廃藩置県を行いました。これによって広徳館をはじめ各藩の藩校も廃止となり、翌年には学制が公布され、全国に小学校が設置されていきました。

呉陽は小学校教育だけでは十分



富山城址二階櫓門は明治時代、俣野小学校(現富山市立芝園小学校)の校舎となりました。(富山市郷土博物館所蔵)

な教育は受けられないと考え、漢学・数学・英語も教える「変則中学校*」の設立に力を尽くしました。

*変則中学校【へんそくちゅうがっこう】1872 (明治5) 年公布の学制では正規の中学校のほかに、それに相当する学校として変則中学、家塾、中学私塾が定められていました。

私塾で優れた人を育てる

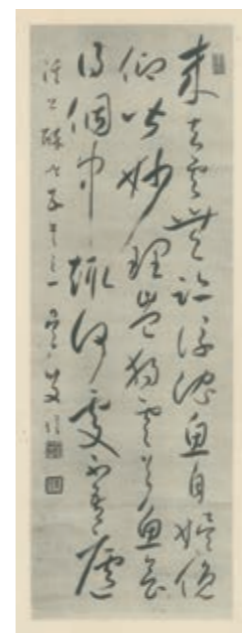
呉陽は広徳館が廃止になる以前から、養父の岡田栗園が開いた塾「学聚舎」でも教えていました。藩と藩校の仕事を辞めてからは「学聚舎」を清水村(現富山市)に移して塾の教育だけに絞り、自分の考えに基づいた教育を行いました。

小学校だけでは修業年限が短く、内容も施設も十分ではなかったため、小学校を終えても、もっと勉強したいと思う子どもたちが呉陽の塾に入って来ました。明治維新の後には藩の廃止とともに私塾もなくなっていきましたが、呉陽の「学聚舎」と、小西兄弟が経営する「小西屋臨池居」だけは存続し、多くの人材が育っていきました。

「小西屋臨池居」は、漢学に加え富山売薬の行商人に必要な知識も教えていました。これに対して、「学聚舎」は漢学・儒学を学ぶ学校でした。富山県での分業・独立運動を進めた米沢紋三郎(→38ページ)らが、「学聚舎」で学んでいます。



「呉陽遺稿」(富山県立図書館蔵)



呉陽の書(富山県立図書館蔵、「呉陽遺稿」より)



呉陽の顕彰碑(富山市於保多町)

夢や志をかなえたポイント

- ・優秀な人の中で自分を高める
- ・その時どきに必要な知識を学ぶ
- ・自分の知っていることは他の人に教える

豆知識 藩校の先生には、いくつかの階級がありました。上から祭酒(学頭)、文学(次席)、教授、学正、訓導と分かれています。呉陽は文学まで務めました。

1825 (文政8)	0歳
新川郡富山町に生まれる	
1844 (弘化元)	19歳
江戸の昌平坂学問所で3年間学ぶ	
不明 (不明)	不明
岡田栗園の養子になる	
1855 (安政2)	30歳
富山藩馬廻役と広徳館の学正になる	
1857 (安政4)	32歳
富山藩横目役になる	
1865 (慶応元)	40歳
広徳館の規則を改める	
1871 (明治4)	46歳
広徳館の一等教師になる	
1877 (明治10)	52歳
富山師範学校の教師になる	
1878 (明治11)	53歳
教師を辞め学聚舎で子弟の教育に専念する	
1885 (明治18)	59歳
亡くなる	

コラム 飛越地震で被災地を飛び回った呉陽

呉陽は有名な学者ですが、机に向かっていただけではありません。藩の役人をしていた1858 (安政5) 年に起きた飛越地震で常願寺川があふれた際、呉陽は数十日間にわたって村々を回りました。寝食を忘れて復旧工事を監督し、また家を流された人々を救うため力を尽くしました。



常願寺川の大洪水の絵図(「安政五年越中大地震 地水見聞録」[部分] 富山県立図書館蔵)

日本一の商人になりたい 安田 善次郎

日本を代表する銀行の創立者 日本初の保険会社を設立 東京大学の安田講堂などを寄付



1838 (天保9) 年11月25日—1921 (大正10) 年9月28日

貧しい中で家計を助ける

江戸時代末期の1838 (天保9) 年、新川郡富山町 (現富山市) の鍋谷横町で生まれました。父は富山藩の下級武士でした。家は貧しく、善次郎も子どものときから畑

仕事を手伝ったり、野菜を売りに回ったりしました。また、貯金を心がけるなどして家計を助けてました。



善次郎の生家

江戸に出た善次郎の誓い

- ・他人に頼らず、一生懸命働くこと
- ・うそを言わないこと
- ・収入の2割は必ず貯蓄すること

善次郎はこの誓いを一生守り通しました。

国を動かす大商人になりたい

当時は厳しい身分制度がありました。下級武士である善次郎も身分の高い武士に憧れよう教え込まれていました。

ある日、善次郎は富山の街で、身分の高い武士が立派な駕籠を見送っている姿を目にしました。「駕籠の中にいるのはだれか」と周りの人に尋ねたところ、殿様にお金を貸している大商人の使いだとい

商人は武士よりも身分が低いと考えられていたので、この光景に善次郎は驚きました。お金の力を悟った善次郎は、「わたしも国を動かす大商人になりたい」と決意しました。

19歳になった善次郎は、商人になるため江戸に行きました。

まじめに働き、商人として成功

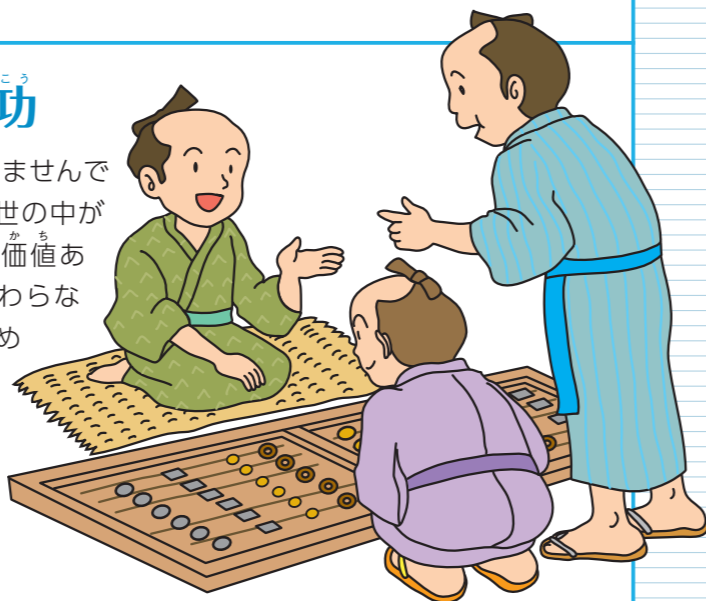
善次郎はおもちゃ屋や海産物商と両替商*を営む店などで6年間修業した後、25歳で独立しました。

初めは、戸板の上に小銭を並べた両替店を開きました。商売は成功し、3年後に両替店「安田商店」として店を構えました。

このころ、幕府が両替商たちに金貨や銀貨を買い集めるよう命じました。他の両替商は強盗にあう

ことを恐れて協力しませんでした。善次郎は「世の中が変わっても、本当に価値ある金銀の値打ちは変わらない」と考えて買い集めました。

熱心に働く善次郎の信用は高くなり、商売はどんどん大きくなっていきました。



*両替商【りょうがえししょう】江戸時代には金貨、銀貨、銭貨の3種類が使われ、両替商はこれらの貨幣を交換しました。お金を貸し付けたり、預金を受け付けたりしたほか、にせものの貨幣を見分ける目利きも大切な仕事でした。



お金を活かし、より良い社会を

明治時代になると、商人たちはお金を出し合って銀行をつくるようになりました。

善次郎も第三国立銀行をつくり、代表である頭取となりました。また、安田商店を基に安田銀行をつくり、全国に支店を増やしていきました。また、お互いに助け合う仕組みが必要だと考えた善次郎は、日本で初めての保険会社をつ

くりました。「日本の金融王」といわれた善次郎の財産は、今のお金にすると約3000億円にもなりました。善次郎は、このお金を社会のために使おうと考えました。富山県出身の実業家・浅野総一郎(→32ページ)など、たくさんの人たちの事業に資金を出して応援しました。

また、東京の日比谷公会堂を寄付したり、東京帝国大学(現東京大学)に講堂を寄付したりしたほ

か、富山県の鉄道や学校の建設などにも多くの寄付をしました。



東京大学の安田講堂



日比谷公会堂 (千代田区観光協会提供)



安田銀行 (現みずほ銀行) 本店

夢や志をかなえたポイント

- ・いざというときのために貯蓄する
- ・自分が良いと信じたことは実行する
- ・信用を大切にす

豆知識 善次郎は「安田商店」を開店したころから死の前日までの50年間以上、1日も欠かさず日記をつけていました。

- 1838 (天保9) 0歳
新川郡富山町の鍋屋横町に生まれる
- 1857 (安政4) 19歳
江戸へ出て、おもちゃ屋などで修業
- 1863 (文久3) 25歳
独立して露天両替商を始める
- 1864 (元治元) 26歳
安田屋を開業
- 1866 (慶応2) 28歳
安田屋を安田商店と改め、両替専業とする
- 1876 (明治9) 38歳
第三国立銀行を設立
- 1879 (明治12) 41歳
安田銀行を設立
- 1882 (明治15) 44歳
日本銀行の理事となる
- 1887 (明治20) 49歳
帝国ホテルなどの会社設立に参加
- 1893 (明治26) 55歳
保険会社を設立
- 1914 (大正3) 76歳
富山市立職工学校などへ寄付をする
- 1921 (大正10) 82歳
東京帝国大学に講堂を寄付したのち亡くなる

コラム ぜいたくな暮らしを嫌った善次郎

お金持ちになった後も、善次郎の生活ぶりはたいへん質素でした。食事はご飯のほかに汁物とおかず1品という「一汁一菜」を続け、無駄使いをしないよう心がけていました。健康にも気を使っていたそうです。



晩年の善次郎

郷土の発展を目指して 藤井 能三

富山県初の小学校を創立 日本海側初の西洋式灯台を設置 伏木港の築港工事を呼びかけた

1846 (弘化3) 年11月9日—1913 (大正2) 年4月20日



裕福な回船問屋の長男

能三は江戸時代末期の1846 (弘化3) 年に射水郡伏木村 (現高岡市) で、能登屋という回船問屋の長男として生まれました。伏木には北前船と呼ばれる日本式の帆船の船着き場がありまし

た。藤井家は北前船を何そうも持ち、米などの品物を運ぶ商売に成功していました。能三は12歳のとき、伏木沖をゆく大型の汽船 (蒸気船) を初めて見て、北前船との違いに驚きました。



藤井商店 (高岡市立博物館提供)

汽船を伏木港へ迎えたい

能三が父の三右衛門から、先祖代々の家業を受け継いだのは18歳のときでした。22歳のとき、仕事で神戸に来た能三は、神戸港が多く汽船でにぎわう光景を見て、ショックを受けました。「帆船しか入れない伏木の港は、新しい時代から取り残されてしまう」このころは、海が荒れる冬には

帆船を出せないため、富山県で秋に収穫した米は春にならないと積み出すことができませんでした。能三は伏木港に汽船が来るようにして、富山県の産業を発展させたいという夢を抱き始めました。

藤井商店が宣伝に使った「引き札」というチラシ。簡単なカレンダーが入っています。(加賀市北前船の里資料館蔵、高岡市立博物館提供)



伏木港に汽船が入港

汽船が入れるよう、能三は伏木港の海底の土砂などをさらって深くすることを呼びかけましたが、人々は賛成してくれません。まずは新しい考え方を学んでもらう必要があると感じた能三は、自分の家を校舎にして1873 (明治6) 年2月、富山県で初めての小学校を創りました。教師の給料や教科書も能三が用意しました。当時はまだ珍しい地球儀を使って地球が回っていることや世界が

広いことを教えました。当時の寺子屋とは違い、英語など最先端の学問が学べるということで、児童は伏木だけでなく、周辺の町村からもやってきました。この3年後には、「女子にも教育が必要だ」と考えた能三は、藤井女児小学校を開きました。自分の財産を地域のために使う能三の姿を見ていた周囲の人々の中には、能三に協力しようという人が次第に増えていきました。



大成小学校の図。伏木小学校は開校した翌年、西洋風に改築し、大成小学校と改名しました。(高岡市立中央図書館蔵、高岡市立博物館提供)

新しい夢の実現に向けて

能三は日本一の船会社の社長である岩崎弥太郎に、汽船を伏木に寄らせるよう頼みました。岩崎は「たくさんの荷物を集めること」と「灯台を造ること」を条件に、汽船を伏木に行かせると約束しました。

能三は荷物集めに走り回り、自分のお金で西洋式の伏木灯明台を建てました。こうして汽船が伏木に入港したときには、たくさんの見物人が港に集まりました。

その後、県内で初めての汽船会社を創った能三の胸には「ロシアのシベリア鉄道を利用して、日本の産物を伏木港からヨーロッパへと運ぼう」という新しい夢が生まれました。

そのために1891 (明治24) 年には『伏木築港論』を発売。伏木港にもっと大きな船が入れるよ

うにしよう」と呼びかけました。努力が実り、1900 (明治33) 年に伏木港とロシアのウラジオストク港の間に定期航路が開通されました。大きな汽船が横付けできるようにする港の工事と庄川の改修工事もありました。

能三の夢の港が完成し、その祝賀会が開かれたのは、能三が1913 (大正2) 年4月に66歳でこの世を去ってから半年後のことでした。



帆船と汽船が入港した明治中期の伏木港 (高岡市立博物館提供)



伏木灯明台は1877 (明治10) 年に建てられた日本海側初の西洋式灯台です。(高岡市立中央図書館蔵、高岡市立博物館提供)

夢や志をかなえたポイント

- みんなのために、自分ができていることを考える
- 約束は実行する
- 自分の考えを理解してもらう方法を考える

豆知識 能三は船の安全のために海の天気を観測する測候所も作り、自分で天気予報もしました。

1846 (弘化3)	0歳
射水郡伏木村に生まれる	
1864 (元治元)	18歳
家業の回船問屋を継ぐ	
1873 (明治6)	26歳
富山県初の小学校を伏木に創設	
1877 (明治10)	31歳
伏木港に灯台を建設	
1878 (明治11)	32歳
天田峠の道路工事を完成させる	
1883 (明治16)	37歳
富山県の分県に協力	
1885 (明治18)	39歳
高岡米商會所を設立	
1886 (明治19)	40歳
経営していた船会社が倒産	
1891 (明治24)	45歳
『伏木築港論』を著す	
1893 (明治26)	47歳
中越鉄道会社の設立に参加	
1913 (大正2)	66歳
亡くなる (葬儀は町葬で行われる)	

コラム 財産をなくしても、郷土のために働いた能三

1886 (明治19) 年ごろからの不景気の影響で、能三の会社は次々と倒産し、北前船で築いた財産をすっかりなくしてしまいました。伏木の人たちは能三を助けようと考え、たくさんの利益が出そうな庄川改修工事の責任者に就かせました。工事が終わってから、使われたお金の内訳を知った地元の人たちは驚きました。能三はほとんどお金をもらわずに、郷土のために働いていたのです。



伏木外港 (平成19年7月撮影)。能三の夢のとおり、伏木港を含む富山港からさまざまな品物が運ばれています。

「9回転んでも10回起きてみせる」 浅野 総一郎

さまざまな事業に挑んだ実業家

「日本のセメント王」と呼ばれた

京浜工業地帯の生みの親



1848 (嘉永元) 年4月13日—1930 (昭和5) 年11月9日

大商人を夢見た医者の子

総一郎は医者の子に生まれましたが、医学の道には進まず、将来は大商人になることを夢見ていました。15歳のときからいくつもの仕事をやってみましたが、どれも

失敗し、多くの借金を抱えてしまいます。このため、23歳になった1871 (明治4) 年、借金の取り立てから逃げるようにして東京へ出ました。



永見市数田にあった生家 (『浅野総一郎』より)

商人として成功したい

商人として成功したいという熱い思いをもっていた総一郎は東京ではまず、砂糖水売り歩き、次に食料品を包む竹の皮を売りました。商売はうまくいき、店を構えて従業員を雇うまでになりました。

知り合いから、「薪や炭などの燃料を売るともうかる」と聞いた総一郎は、薪や炭の商いに精を出しました。安い薪や炭を大量に仕入れ、他の業者よりも安く売った結果、貿易商人や役所に炭を買っ

てもらえるほどの信用を得るまでになりました。

そのうち、燃料にはガスが使われるようになりました。ガスを作るときに出るコークス*やタールなどの処理にガス会社が困っていることを知った総一郎は、これらを有効に利用する方法を研究しました。そして、国が経営する深川セメント製造所に、コークスでセメントを焼く方法を提案し受け入れられました。



青年時代の総一郎 (太平洋セメント提供)

赤字のセメント会社を立て直し

その後、官営の深川セメント製造所では赤字が続く、民間に払い下げられることになりました。「セメント工業は将来発展する」と信じていた総一郎は、払い下げを受けたいと申し込み、最初は国から借りることになりました。総一郎は工場名を「浅野セメント工場」に変え、自分も従業員と一緒に働きました。

1884 (明治17) 年に工場は総一郎に払い下げられ、1898 (明治31) 年に「浅野セメント合資会社」となりました。このときに10万円を出資したのが、同じ富山県出身で、安田銀行を創設した安田善次郎 (→28ページ) でした。安田は総一郎を高く評価し、その後も総一郎の事業を支援していきました。



総一郎に払い下げられた官営深川セメント製造所の工場 (太平洋セメント提供)

*コークス【こーくす】 石炭を乾留(蒸し焼き)した燃料のこと。燃やしたときの発熱量が高いことから、鉄を作るときに欠かせない燃料となっています。

故郷のための二つの公益事業

1896 (明治29) 年にヨーロッパを視察した総一郎は、日本の港の貧弱さを痛感しました。総一郎は、港と工場が一体となった臨海工業地帯を造れないかと考え始めました。総一郎は神奈川県鶴見沖の遠浅の海岸を埋め立てて、規模の大きな工業地帯を造る計画を立てました。資金は安田善次郎 (→28ページ) らが援助し、約14年を費やして京浜工業地帯の基となる埋め立て地が完成しました。

このころ総一郎は「故郷へ贈る二大公益事業」の構想を発表しています。その一つが「高伏運河建設構想」です。高岡駅と伏木の間に運河を掘り、放生津瀉を埋め立てた工場用地と結んでこの地域を日本海側最大の工業地帯にしようとするものです。

もう一つの「庄川水力発電構想」は、庄川にダム式発電所を建設し、その電力を太平洋側の工業地帯へ送ろうという大事業です。

「高伏運河建設構想」は、現在の伏木富山港の臨海工業地帯へとつながっていきました。「庄川水力発電構想」については、総一郎は小牧ダムの建設に取りかかりました。その後、事業は日本電力(現関西電力)に引き継がれていきました。



湛水直前の小牧ダム



庄川水記念公園に建てられた総一郎の銅像



京浜工業地帯 (国土交通省関東地方整備局京浜港湾事務所提供)

夢や志をかなえたポイント

- ・ 何度失敗してもくじけない
- ・ 力になってくれる理解者をもつ
- ・ 社会の役に立つ仕事を見つける

豆知識 「七転び八起き」とは、失敗のたびに立ち直ることです。失敗が多くても、立ち上がった総一郎は「九転び十起きの男」ともいわれています。

1848 (嘉永元)	0歳
水見郡数田村に生まれる	
1871 (明治4)	23歳
事業に失敗し上京する	
1872 (明治5)	24歳
鈴木サクと結婚	
1873 (明治6)	25歳
横浜で新炭商売を始める	
1878 (明治11)	30歳
横浜に日本初の公衆便所を設置	
1881 (明治14)	33歳
「浅野セメント工場」を発足させる	
1898 (明治31)	50歳
浅野セメント合資会社設立	
1913 (大正2)	65歳
東京湾埋め立て工事に着手	
1919 (大正8)	71歳
庄川水力電気設立	
1930 (昭和5)	82歳
欧米視察中に発病し帰国後亡くなる	

コラム 浅野の事業を 陰で支えた妻サク



総一郎の妻サク (『浅野総一郎』より)

総一郎は東京で竹の皮を売る仕事をしていたころ、布団が買えず店の向かいの呉服屋から借りていました。その店で働いていたサクという女性に恋して、結婚しました。

サクはよく働き、総一郎を助けていました。総一郎の会社の一つである関東水力電気が建設を請け負った群馬県の「佐久発電所」の名前はサクの名前にちなんだものです。